

## 事例研究の展開

発表者 二村 美代子  
耳鼻咽喉科一同

### 事例研究のプロセス

1. 事象の紹介
2. 状況の確認
3. 解決されなければならないことの発見
4. 問題解決への予測をたてる
5. 予測したことへの対策をたてる
6. 実施
7. 評価

### テーマ 失声状態にある患者のコミュニケーション

毎日Nsは気管切開あるいは喉頭全摘を受けたPtの看診にあたり意志の疎通の難しさを痛感しています。

そこで失声状態にあるPtのコミュニケーションの問題を取り上げて検討することになりました。

先ず研究を進めてゆく上で今まで行ってきた看診の確認をしました。

#### 1) 主体性がNsにある問題点

- NsにPtの書いた文字の意味が読めない場合がある。
- NsはPtの示すジェスチャーの意味が解らない場合がある。
- 失声に際して行いオリエンテーションが画、一的で個別的なものでない。
- 失声に対して、Ptの気持を傾聴しようとする努力に欠けている。
- 文字板使用にあたっては文字板の内容はNsの考えにおいて決定され術前に渡すことをしていない。
- 五十音板は文章として理解しにくい。
- 文盲のPtにも同じように対処していた。

#### 2) 主体性がPtにある問題点

- Ptは他の疾患に比べ精神不安定でおこりやすい傾向が強い。
- 筆談は術後のPtにとって余分な負担をかけているのではないか。
- 老人はあまり字を書きたがらない。
- Ptは意志をジェスチャーで示し易くその意味がPt個々によって異なる。
- Ptにとって五十音板は字をさがし難い
- Ptは自分の社会的文化的背景をあまり話したくない

今まで行ってきた看護は次のような内容においてNsの努力が足りなかったと思います。

- 1) Nsは失声状態にあるPtの気持を理解をもって傾聴することが必要であった。
- 2) 失声に際して行うオリエンテーションはPtの社会的文化的背景を知った上で個別的に行う必要があった。
- 3) 筆談 文字板など物品の使用にあたっては前もって実物を使ってデモンストレーションする必要があった。
- 4) NsはPtに好きな表現方法を選択させ強制しない。

Nsは今まで行ってきた看護の反省を考慮して失声状態にある

Ptのコミュニケーションは次の事項によって努力すれば問題は改善されるのではないかと考えます。

- 1) Nsは失声状態にあるPtの気持を理解をもって傾聴することによりPtの意志をすばやく知ることができる。
- 2) 失声に際して個別的に行うオリエンテーションはPtを一人の人間として尊重することである。
- 3) 失声に対して実物を使ってデモンストレーションすることによりPtは容易に活用することができる。
- 4) 失声状態にあるPtが好きな表現方法を採用することによりPtは精神的肉体的な負担が少なく意志表示できる。

次にNsは失声状態にあるPtのコミュニケーションの問題解決の予測に対して下記の対策を話し合いました。

- 1-1) 松村康平先生の言われる看護心理劇によりPtの心理をつかむ
- 2-1) Ptの社会的文化的背景を知る
  - 2) Ptの性格、習慣を知る
- 3-1) 文字板の作成はPt、Ns両者で検討する  
先ず、Ptの必要とする内容を列記し更にNsが必要と思われる内容をつけ加える
  - 2) 文字板は厚紙でマジック書 ひらがなで大きく縦書とする
  - 3) 筆談にはスクールメイト メモ用紙、マジックを用意する
  - 4) 文字板の作成 実物を使ってのデモンストレーションは手術前日までにすませる
- 4-1) Ptに表現方法を選択させる

## 実 施

### 1. 心理劇による問題発見

場面 朝の検温時の場面

排尿感あるも排尿なくて苦痛な場面

登場人物 患者(床上に仰臥する失声状態の患者)

受持看護婦

## Ptの役割を演じた感想

- 失声状態にあることは非常にいらだちを感じる  
一度で解ってもらえないと余計いらいらする
- 具体的な質問でないと返答に困る  
抽象的な質問 例えば どうでしょうか 如何ですか どの位ですか etc は返答に困る
- 安心感がほしい

## 観客の感想

- Ptは失声状態のためか 受持Nsの言葉数が非常に多い

## 心理劇より得られた発見

- 1) 発声できないという異常なPtの気持をある程度理解できた
- 2) 失声状態のPtが精神不安定でおこりっぽいということはNsからPtへの働きかけが非常に強い為にPtNs両者のコミュニケーションの間でバランスがとれていない所に問題が生ずるのではないか
- 3) 失声状態のPtが容易に返答できるように具体的な誘導質問が必要な場合が多い
- 4) 訴えに対して安心感を与える為に、科学的な理由づけが必要である

## 2. 対象者へ実施(ケース1)

### 対象者の社会的文化的背景

60才 男 舌痛 入院五回目 舌全摘術前

学歴は尋常小学校 職業は農業 失声の経験なし

無口で我慢強く意志強固である 闘病意欲ありて、治療に協力的である。家庭においては中心的な立場である。舌はほとんど腫瘍におおわれ言語障害、嚥下障害あり、本人は手術を強く希望している。

### 対象者に実施して得られた発見

- 1) 個別的なオリエンテーションの効果ありて意志の疎通がほぼスムーズに行われている
- 2) Ptは文字板を充分自分の物として活用し使いこなしていた。  
例えば、頭痛に対しては痛いということは文字板を使用し部位はジェスチャーで示した。
- 3) スクールメイトについては、より確実で十分なコミュニケーションができるようになった。  
例えば、食事においては趣向に関してまでも訴えるようになった。
- 4) 突作の場合は、ジェスチャーで示され易いので術前にジェスチャーについて相方のとり決めと訓練が必要に思われた。
- 5) 文字板の内容においては単語のみでなく主語述語を用いたものの方がより簡潔にゆくのではないか。
- 6) 文字板の文字の配置や大きさ、色なども検討する必要がある。

## 評 価

- 1) 実施期間が浅いので、きめ細い観察に不十分な所や、勉強不足な為、科学的な物の見方に無理な所があって現在はまだ予測に対する確証まではつかめていないので、今らは対策に従いより多くの対象者に実施評価する勉強会などをもって科学的な物の見方を学んでゆく
- 2) 特別なケースとして文旨弱視の対象者に対して如何にするか検討してゆく
- 3) 失声状態にあるPtとNsのコミュニケーションの関係はとかくNsからPtへの働きかけが強く一方的になり易い  
PtとNsのコミュニケーションのバランスを保つには如何にしたらよいか更に対策を立て検討する。
- 4) Pt、Nsの相互交渉において看聴心理劇を応用して問題発見に努めることは有益なことであり、大いにとり入れてやってゆきたい。
- 5) 事例研究のプロセスにそった問題の展開の仕方を訓練し学んでゆく。

次回は評価に基づいて更に研究して行きたいと思います。